

研究報告・東京外大・AA 研共同利用・共同研究課題・2018-2020 年度・第 5 回研究会

セミナー：「ダリトは語るができるかー南アジアの民族誌的研究の課題」

日時： 2020 年 2 月 17 日（月）13:00-17:30

会場： 東京外大 AA 研・304MM 会議室（府中キャンパス）

共催： AA 研・共同研究課題、基幹研究人類学班、科研基盤 A[19H00554]、FINDAS

プログラム：

趣旨説明：外川昌彦

報告 1：池亀彩（東京大学）

「南インドのダリトによる水牛供犠の拒絶ー人類学的研究はどう彼らの声を聞き損ねたか」

報告 2：杉江あい（名古屋大学）

「ムスリムの被差別集団を何と呼ぶか?-バングラデシュ農村における楽師集団の事例から」

ディスカッサント：田辺明生（東京大学）

<概要>

第 5 回研究会では、2 人の報告者と 1 人のディスカッサントによる研究会が組織された。はじめに、共同研究会代表者の外川昌彦が、これまでの研究会での議論を踏まえて、本セミナーの企画に至った趣旨を説明した。趣旨説明は、以下の通りである。

「ベンガルのある農村社会では、村のダリトを代表するドム・カーストが村落祭祀を主宰するバラモンに儀礼的な戦いを挑み、最後に剣を措いて恭順の意を示すという儀礼が行われる。年に一度の大祭で、ドムの人々は常に戦いを挑むのだが、しかし彼らは、毎年、バラモンに負け続けている事になる。ドムの人々は、なぜ、従属的な位置づけを導く村落儀礼に、自ら参与してきたのだろうか(『ヒンドゥー女神と村落社会』外川昌彦, 2004 年, pp.224-5.)。

ヒンドゥー社会研究では、このような儀礼のイデオロギー性を明らかにする多様な研究がなされてきたが、ダリトを含むカーストに関わる既存の階層関係は、むしろその前提として描かれてはこなかっただろうか。近年では、しかし、社会変革に向けた政治動員とは別に、バラモンの理念に対してその当事者として異を唱え、「ヒンドゥー教」への帰属を否定するダリト知識人も現れている。南アジアの民族誌的研究は、その多様な階層にかかわる人々の声をすくい上げることができるのだろうか。本セミナーは、南インドのダリトの人々の女神儀礼との関りと、ムスリム社会に埋め込まれたカースト的差別的にある人々の事例を通して、この問題を考えてみたい。」

第 1 報告者の池亀彩（東京大学）は、「南インドのダリトによる水牛供犠の拒絶ー人類学的研究はどう彼らの声を聞き損ねたか」と題し、カルカーナタ州の水牛供犠儀礼の事例に基づき、ヒンドゥー儀礼へのダリトの関りやその民族誌的表象について、英領期の人類学的研

究から今日に至る研究史を踏まえて考察した。趣旨説明は、以下の通りである。

「インド村落の女神信仰は、寺院エリート中心のバラモンの伝統とは異なり、土着文化に根ざす非排他的な民衆文化と見なされてきた。だからこそ、カルナータカ州最大ダリトのマディガの一部が女神祭祀に欠かせない水牛供犠を拒絶しはじめたことは、支配カーストだけでなく、ダリトの不満に気づかなかった人類学者等にとっても衝撃的である。本発表では、1970-80年代の構造主義的な女神信仰理解が20世紀初頭のキリスト教宣教師たちの民族誌的記述に大きく依拠し、その記述の取捨選択の中でダリトの声が無視されてきたことを明らかにする。さらに19世紀中葉以降のネーションとしての「ドラヴィダ」概念がダリト知識人の中に生き続け、現在の政治・文化運動に繋がっていることを議論する。」

第2報告者の杉江あい（名古屋大学）は、「ムスリムの被差別集団を何と呼ぶか？—バングラデシュ農村における楽師集団の事例から」と題し、南アジアの職能集団・芸能集団である楽師シャナイダルを取り上げ、現代バングラデシュ社会では可視化しにくいムスリム社会の被差別集団の民族誌的表象の問題について考察した。趣旨説明は、以下の通りである。

「南アジアではヒンドゥー以外の宗教徒の間でもカーストと類似した被差別集団が見られる。ムスリムのそうした集団に対し、学術研究では統一された見解や用語はないが、近年では「ダリト」という名称を使用する市民団体も見られる。本発表では、バングラデシュの農村社会において「シャナイダル」と呼ばれる楽師を（伝統的）職能とする集団が、どのように差異化・序列化されているのか、またシャナイダルら自身がどのように名乗り、自らの系譜を主張しているのかを明らかにすることから、民族誌的研究がムスリムの被差別集団をいかに記述しうるのかを考察する。」

研究会の後半では、はじめに、ディスカッサントの田辺明生（東京大学）によって、ダリトにかかわる民族誌的表象の問題について、特にガヤトリー・チョックロボルティ・スピヴァクを中心とした、サバルタン研究の理論的視座についての批判的検証を踏まえて考察し、その上で、2つの報告に関する詳細なコメントがなされた。その後、2人の報告者による応答がなされ、さらに全体討論では議論がフロアーに開かれることで、参加者より活発な意見交換が行われた。

*当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.